優しいサヨクのための嬉遊曲

simmaiju musikiko

島田雅彦

福武書店

島田雅彦（しまだ・まさひこ）
一九六一年、東京に生まれる。四歳で川崎市に移る。県立川崎高校から東京外国語大学ロシア語学科へ。現在四年在学中。「優しいサヨクのための嬉遊曲」が第八九回芥川賞候補となる。鮮烈な感性で同時代を描き、最も新しい世代の作家として注目される。

優しいサヨクのための嬉遊曲

一九八三年八月一〇日第一刷印刷
一九八三年八月一五日第一刷発行

定価九八〇円

著者　島田雅彦
発行者　福武哲彦
発行所　株式会社　福武書店
東京都千代田区麹町六―六
〒一〇二　電話（〇三）二三〇―二一三一
振替口座（東京）六―一〇五〇九七

本文印刷　大日本印刷
平版印刷　栗田印刷
製本所　加藤製本

（落・乱丁はお取替え致します）

© M. Shimada 1983
ISBN4-8288-2072-8 C0093

目次

優しいサヨクのための嬉遊曲　5
カプセルの中の桃太郎　153

裝丁　菊地信義

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

優しいサヨクのための嬉遊曲

優しいサヨクのための嬉遊曲

一、千鳥足の恋

待ち伏せは四日目に入った。オーケストラ団員である彼女はもうすぐ、この場所を通るはずだった。練習を終えた彼女はまっすぐ家に帰るため五時にここを通る計算になる。

待ち伏せは苦しいものだ。もう四日目になると失踪した妻を探す夫の姿に似てくる。千鳥姫彦は今朝、鏡を見てそう思った。

かつて、千鳥は彼女と五秒間、視線を結び合った。彼女は向いのベンチに坐って空気を見ていた。彼は本のページに固定していた目をたまたま彼女の方へ向けた。遊ん

でいた彼女の目も照準を彼に向けた。この五秒間は夫婦生活に匹敵するほどの意味を持っていた。六秒目には離婚してしまったのだが。

千鳥は五秒間の夫婦生活の憶い出にひたるようになった。再び夫婦になりたいと思った。

夜、一人で自室のベッドに腰かけ、鍵のかかったアルミサッシの窓を見ていると彼女の顔が思い浮んできた。記憶の中の彼女の像は少しぼやけていたが目と唇は強調されていた。

千鳥の部屋の窓は厚い曇りガラスで、窓の向う側には黒いアルミ格子が入っていた。外からこの部屋をのぞくと、彼は幽閉者でもあるかの如く見えるかもしれない。いや、彼は現にこのベッドタウンのマンションにあっては幽閉者だった。看守も訪問者もいなかった。誰も彼の部屋をのぞかなかった。しかし、幽閉者はのぞかれたかった。例えば彼女に。

彼は窓を開けた。アルミ格子の向うに彼女が立っている情景を想像した。「こんにちは」「やあ、会いに来てくれたのかい」「そう」「有難う、チョコレートでも食べる

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

かい」「うん」二人は窓ごしに見つめ合う。

千鳥は彼女に同族意識のようなものを抱いた。似たような環境にいるのではないか、彼女も幽閉者なのではないか、兄妹のような絆が二人の間にあるのではないかと。ひょっとしたら、彼女は父の隠し子ではないのかという期待まで抱いた。近親相姦という神話の世界で遊べるかもしれないと。

誰でも夜中、ベッドにいる時は思考の原野を駆けめぐるものだ。

千鳥は高校を卒業する頃、はじめて少女漫画の雑誌を手にした。近親相姦をテーマにした異色のドラマのヒロインに魅かれ、以後連載が終るまで読み続けた。ドラマの舞台はフランス革命前夜。地下革命組織の幹部である兄と兄の心の支えとなっている妹はパン屋の屋根裏部屋に二人きりで暮していた。警官が発砲した弾丸を受けた兄は血まみれになって部屋へ戻ってくる。妹は兄の傷の手あてをし添寝して兄を守る。ある日、妹が食物を探しに出かけるが警察に拉致され幽閉されてしまう。傷も癒えぬうちに兄は妹を救い出そうとする。しかし捕えられ、地下牢にぶち込まれる。そこには妹もいた。二人は抱き合い、結ばれる。千鳥は自らこの兄の役になった。

千鳥はもう十五分待ち伏せを続けていた。彼女が現れるまでの秒読みが始まった。

待ち伏せ初日もきのうも彼女は同じ頃ここを通ったのだが、素通りしてもらった。初日は門の陰で彼女の容姿を点検するための待ち伏せだった。きのうは自分の顔を憶い出させるためだった。そして、きょうは……。

彼女は一人で、バイオリンケースを提げて歩いてきた。水色のワンピースが風で波打っていた。長い首、あまり豊かではないが抽象彫刻のような胸、珊瑚色の唇が接近してくる。遂に彼女は千鳥の攻撃半径の中に入った。彼はシナリオ通りにセリフをいうため思考を中断して、彼女に襲いかかっていった。

「こんにちは」

「えっ——こんにちは」

「お帰りですか」

「ええ」

「御一緒しようと思って待ってました」

「ずっと？　ここで？　どうしてですか」

千鳥は鏡を見ながら訓練した笑顔をつくって答えた。
「お話がしたいんですよ。僕の顔ぐらいは知ってますね」
「はい、何度か拝見しましたけど」
「僕は千鳥姫彦です」と名のると、四分休符を置いた。「で、あなたは？」
「名前ですか、逢瀬みどりです」
「みどりさん、じゃあ行きましょうか、みどりさん」
「何処へ」
「帰るんでしょ」
「ええ」
みどりの髪の匂いがした。茶色の瞳、白い肌、顔には余計なものは一切なかった。型を取りはずしたばかりの石膏像のような〈顔のエッセンス〉だった。
「今後あなたにつきまとわせてもらいますからよろしくね」そしてあの文法通りの笑み。「迷惑じゃないですね」
「いきなりいわれても……。なぜですか」

「その理由は話せば長くなります。今、話してもいいけど、それよりコーヒー飲みませんか。三〇分くらい」

新興住宅地のベッド村に稼ぎ人たちが帰ってきた。千鳥は仮面ではない笑顔になって帰ってきた。逢瀬みどりの顔や声を反芻しながら。時々、「みどり」と名が口から漏れた。

その日、みどりから聞き出したことは殆ど全て千鳥の記憶に入った。彼女は妹ではなかったが妹的な女の子だった。恋をしたことがないといった。ということは処女なのであった。千鳥は自室でベッドに腰かけ、窓を見ながら決心した。彼女を救出してやろうと。彼女に感じた同族意識は当を得たものだった。二人とも幽閉者だったのだ。彼女は父親の監視のもとで自由を奪われているに違いなかった。

彼女の父親は千鳥の仮想恋敵となった。

何日か経って、千鳥は再び彼女に会った。火曜日に図書館のロビーで。

「毎週ここに来てほしいね。つまり火曜の午後四時には図書館にさ」
「来れない日もあると思う」
「だろうな。来れる日は」
「来てもいいわよ」
「嬉しいね」
（さてと千鳥は考えた。（どういうふうに話そうか（どういうふうにさわろうか）（どういうふうに……）
門を出て右へ行くか左へ行くか迷った。右へ行けば駅、左は墓地だった。左を選んだ。
みどりは空気を見ていた。空気の微妙な色彩を調べているようだった。試しに「何見てるの」と聞いてみた。
「何も見てない。見えるけど見てないの」
「世間にあって世間から遠ざかってるわけだ。君のまわりには隔膜があるのか」
「そう」

「その中に入れてくれませんか」
「もう入ってるじゃない」
「そうなの？」
墓地の入口では、顔からして躁状態の少女が一人芝居をしていた。少女とその分身の二人はボソボソと会話していた。会話の中身は聞きとれなかったが、その二人の関係は母と娘であるようだった。そこへ男女二人連れの訪問者が現れたので、少女は別の芝居に切換えた。
「ここから先に行くとお化けが出るよ」といってから相手の表情を窺い、「女と男と二人で歩いてるとお化けに襲われるんだよ」と続けた。
「どんなお化けだい」千鳥は口先で素気なく尋ねた。
「いつもお酒飲んでてね、くさいの、それでこんなに大きいの」少女は腕を高く揚げて跳び上った。
七八歳の子にしては声が太い。そのおかっぱの女優には色気があった。子供という中性の人間特有の、よだれが酸化した匂いがかすかに漂ってきた。その匂いはみどり

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com